

第3回 練馬区小中一貫教育推進会議 会議要録

開催日時	平成26年2月25日(火) 午後6時～午後8時	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	葉養正明、岡田行雄、横澤由明、青柳直美、吉羽哲夫、松丸晴美、佐野 匡、大瀧訓久、郡 榮作(敬称略)
	協力委員	飯塚将史、福島博史、濱屋雄二、山中順子、北村比左嘉
	事務局	教育振興部教育企画課、学務課、教育指導課
傍聴者	なし	
案件	(1) 第2回推進会議でいただいた主な意見 (2) 施設一体型と施設分離型における具体的な取組 (3) 小中一貫教育実践校の役割	

委員長

先ず、第2回の要点録について、事務局から説明をよろしく願いいたします。

事務局

ご確認いただいて、お気づきのことがありましたら、事務局まで1週間程度でご連絡をお願いします。

委員長

次に事務局から配付資料の確認について、よろしく願いいたします。

事務局

(資料確認)

委員長

それでは、案件(1)の「第2回推進会議でいただいた主な意見」に入らせていただきます。
事務局から説明をお願いします。

事務局

(資料1説明)

委員長

ただいまの説明について、何かご質問等ございましたらお願いします。

資料1については、よろしいでしょうか。

案件2は「施設一体型と施設分離型における具体的な取組」です。事務局から、ご説明をよろしく願いいたします。

事務局

(前回資料8説明)

委員長

前回資料8について、前回の会議で十分に時間をとれなかったものですから、ご意見を伺わせていただきたいということでございます。

前回、資料3について差し替え用の資料が提出されています。その資料に論点が整理されておりまして、「小中一貫教育の定義」、「小中一貫教育の必要性とめざすもの」、「中学校への進学先と小中学校の組合せ」については、前回ご意見をいただきました。四つ目「施設一体型と施設分離型における具体的な取組」の中に、具体的な記述が①から③までありますので、まずこの3点を中心にご意見をいただければと思います。

委員

今年度は、昨年度作りました課題改善カリキュラムを実践していますが、今のところ効果はまだ見られません。3校で共通してやっという事で課題が共有できてよかったと思っております。

委員

本校(中学校)に隣接の小学校と算数、数学、保健体育の9年間の課題改善カリキュラムを2年間かけて作らせていただきました。隣接の小学校との連携ですので、授業もお互いに見に行けて、スムーズにできたと思います。施設が離れていても近ければ可能だと思います。

今年から3校の小学校と課題改善カリキュラムの実践に取り組んでいますが難しい面があり、例えば道徳に取り組むなどもう少し幅を広げたものにしなないと3校の小学校と中学校の計4校での連携はできないと思いました。

委員

保護者の立場では、施設分離型と施設一体型、施設分離型の中でも地域性によって課題改善カリキュラムの内容が変わってくると思います。公教育では住まいの学区に行かざるを得ないわけですので、そこで教育内容に差があることには、非常に違和感を感じるので、地域性や学校の状況によって問題点は違うと思いますが、非常に難しい話だと思います。ただ、保護者の立場からすると、ある程度は連携でも区内全域で統一するものがあるべきではないかと思っております。

委員長

事務局が資料8を用意された意図、議論してほしい内容について説明をお願いします。

事務局

小中一貫教育校というと施設一体型のイメージですがけれども、他の自治体の中には施設分離型の小中一貫教育校を設けているところもあります。練馬区で、施設が離れた学校間での小中

一貫教育を小中一貫教育校と位置付けていくかどうかということも課題になると思います。学校の在り方としてポイントを整理したいと思いました。

①の義務教育9年間を見通した教育課程とは学校の教育活動の在り方を計画するものです。離れた別々の小学校、中学校の内容をどこまですり合わせできるか。教育課程は各校の校長が編成することになりますので、どこまで小中一貫教育校として位置付けられるものになるのかという点についてお感じになっていることがあればご意見いただきたいと思っています。

②につきましては、連携を進める運営ということでかぎ括弧で例が出ておりますけれども、教育目標の系統性などを一致させているところが他の自治体にあります。施設が離れた小中学校で応用できるものは何かないかということで、お感じになっていることをいただきたいと思っています。

③につきましては、今、小中学校のグループを指定して、課題改善カリキュラムの作成と実践等に取り組んでおりますけれども、そういった教育活動を通じてお感じになっていることをいただきたいと思っています。

委員

①について、施設が離れた小中学校における一体的な教育課程や学校の在り方に共通することとして、本校のグループでは、例えば生活指導で挨拶、礼儀などについて、挨拶では語先後礼という申し合わせがあって、しつけ、学習規律、学習の仕方などは揃えようと思えば揃えられると思ひ、今進めようとしています。

中学校に連携教室ができて中学校の先生が指導に当たり、2校の小学生がそこで勉強をするときに共通体験ができるという点では、離れていてもある程度共通に揃えることはできると思ひます。ただ、例えば理科室での指導、家庭科室、体育で校庭やプールなどの施設を利用した教科指導になると、一体型であれば同じものを使うから9年間の指導計画はできると思ひますけれども、分離型だと場所が違って、そこにあるものも違うということになると、そこも少し難しいところがあるかなと思ひます。

協力委員

教育課程の在りについてですが、分離型では資料7の三鷹市のイメージがわかりやすいと思ひます。3校連携の場合、3校の校長の中から学園長1人、副学園長2人という形がイメージが付きやすく、その3人の校長先生が学園長、副学園長として教育課程を編成していくことはできるかと思ひます。基本的に一つの教育課程を作れば、各学校の教育課程もすり合わせられる部分は出てくるのではないかと思ひます。

今の実践校のように、3人の校長先生がそれぞれ話をしながらやっていくという考えではなくて、一つの学園として、三鷹市のように3人の校長先生が、1人は学園長、残りが副学園長という形にすれば、多くの部分ですり合わせはできると思ひます。

2番の教育目標の系統性は当然考えていかなければいけないことだと思ひます。校務分掌については、例えば小学校の片方が大きくて片方が小さいというように、学校規模が違うと難しい部分があると思ひます。一つの学園としてどこを連携していくか考えていけばある程度明確にはなってくるのではないかと思ひます。時間割編成や教科担任制についても、できるところ、できない部分があると思ひます。

資料8の三条市の併用型は、とてもわかりやすいと思います。隣接している小・中学校であれば併用型で、例えば曜日を決めて、杉並区の高円寺中学校でもやっていたように、一部の小学校高学年の児童が中学校に行って授業を受けるという取組はできると思います。

大きく分けて一体型と分離型、さらに分離型の中で距離が近ければいわゆる併用型になると思います。ただし、学園長1人、副学園長が2人という形をとって、3校で一つの学園としてやっていくのであれば、分離はしていても、教育課程を作っていく中で、一つの教育課程はできるのではないかと思います。一方で、小学校側の地域の事情もありますから、その学校独自でやっていく部分というのはあってもいいと思います。私はそういう形が一番イメージをしやすいです。

委員

3番の課題改善カリキュラムは、連携を進めていくツールとしてはとても今、役に立っており、これは成果だと思います。課題改善カリキュラムを作ろうとすることで、校種による違いを乗り越えて相手が何をやっているかということをも改めて見直すだけではなく、作る作業を通してお互いが理解するところは、すごく成果があったところだと思います。それがどれぐらい実効性が出てきて、子供たちにどんな効果として返っていくのかということところは、課題としてこれから先を見ていきたいところです。

1番のところへ戻りますが、今、指摘があったように、校長先生方の共通理解は連携・一貫を進めていく上でとても大きいと思います。ただ、教育課程の編成権を校長がもっている中で、例えば先ほど言った学園長とか副学園長とかというシステムがない中で、「こういう方向で行きましょう。こんな子供たちを育てましょう。今、うちの地域の子供たちはこんなところが課題だから、こういうことを目指してやっていきましょう」というところまでは恐らくすり合わせができると思います。その先のかかなり細かいところまですり合わせをしようとする、それぞれの学校の校長先生方にとっては、ご自分がやろうとする学校経営がやりにくくなる面もあるのではないかと懸念があります。

協力委員

委員の先生方のところでは、小中9年間を一貫教育として掲げる教育目標を作っている学校はありますか。

委員

うちのグループの3校の中では教育目標はまだそろっていません。

委員

研究グループであった小学校とはありましたけれども。今年度からのグループに加わった小学校とは今はありません。

委員

本校は実践校でも研究校でもないので、全くありません。

委員

教育課程の届出の時期ですが、本校のグループでは、9年間の学校教育目標を3本立てています。その下に小学校、中学校それぞれの教育目標があるので、9年間の目標のこれに当たるのは、うちの小学校ではこれかなという形で、先ほどの話ではないのですけれども、送り出す側としてはこういう形でやろう、受け入れる側としてはこういう受け皿でやるというような形で、中学校でイニシアチブをとってもらって方向性を出してもらって、それに合わせるような形でやっています。

当然校長がそれぞれいるわけなので、9年間のうちの6年間のこのところはこういう形でやっていく、教科の指導や道徳は、これは9年間のあそこのあれに当たるというような形で、そういう位置付けと解釈と意識を共通してもっていかないといけないと思います。学園長、副学園長の話を聞いて「なるほどそうだな」という感じがします。

委員長

今日の議論とつながっている話だろうと思います。先に進めさせていただいてよろしいでしょうか。案件3の小中一貫教育実践校の役割に移らせていただきまして、事務局から資料説明をお願いします。

事務局

(資料2～7 説明)

委員長

小中一貫教育実践校の役割ということで9点挙げられています。どの項目からでも結構でございますので、ご出席の先生方1人ずつご発言いただきたいと思います。

協力委員

①の実践校における課題改善カリキュラムの作成が授業改善につながっていると言えるかということですが、先ほどから出ていますように、課題改善カリキュラムを作成する段階で、児童・生徒の課題はどこのかということ話し合ったり、カリキュラムの構成を小中学校の教員で協力して学び合うことで非常に理解が深まりますし、中学校の教員にとってみると授業スタイルの改善とか、小学校の先生にとってみると、教科の系統性といったことを理解するととてもいいツールとして、授業改善にとっても役立つ取組というふうに考えています。

検証をどのように行うべきかというところと関係しますが、それがどう生かされて授業改善の効果がどう出てくるかというところは、課題として残っています。

研究グループの2年間で作るということの意味はとても大きくて、それが実践校になって実践してみながら検証していくというこの流れは、とてもいいものと考えています。

実践校で実際にやってみる中で、小中学校でどこをそろえていくのか、あるいはどう系統性を生かすのかということが課題になって、だんだん具体的になってきています。最初に作った段階の課題改善カリキュラムは、ぼやけた部分が多いのですけれども、これをどこに焦点化していこうかという視点が今、本校ではでき上がってきていると思います。特に乗り入れ授業を計画していますので、そこではどこに着目してという絞り込み作業をこれから進めていこうと

いうところに進んでいます。

②ですけれども、練馬区全体としての全科の課題改善カリキュラムということなのですから、やはり全科で進めることは大切だと思います。ただし、ほかの学校のものは参考になるのですけれども、やはり環境が違うので、その校区独自のものがやはり絶対必要というか、必然的に生まれてくるというか、そういった取組になっていくかと思います。

最後に、3番目の組み合わせが固定的ではなくということですが、プラスにもマイナスにも考えられます。どうしても地域にこだわってしまうのですけれども、地域の子供たちの特性というもので指導していく場合には、ある程度組合せというのは固定化していただいたほうが効果的だと考えます。一方で、ほかにいろいろな中学校、小学校の特性を理解する教員側の指導力、見識を広めるという観点からすると、流動的というのもある意味、効果はあるかと思えます。ただし、やはり本当にカリキュラムを実践していくためにはどンドン絞り込んでいきますので、ある程度の固定化というほうが方向性としてはありがたいというか、いいのではないかなと考えています。

協力委員

先日、校区の小中学校の合同研究会で講師の先生から「課題ができる、できないではなくて、どこで子供がつまづいているかという質的な面に目を向けるべきだ」というご指導を受けました。検証で、質的なものに目を向けると結構時間がかかると思うのです。子供ができたかできないかではなくて、子供がどういう思考の過程を経て正解したのか、間違えたかということも今後考えて授業改善していくべきだなというのを学びました。

その際、課題は何の課題かという点ですが、今、目の前にいる子供の課題と考えると、やはり地域によって実態が違うと思うので、ある程度グループは固定化して、今、目の前の子供は何を考えてどんな実体かというのを分析しながら、質的なものを高めていくことが大事なのではないかなと思います。

カリキュラムの系統性ですけれども、突飛なことをやるのではなくて、発達段階に応じたものを指導者側としては9年間を見通して、中学校で繰り返し低学年のことをやるとか、小学校で中学校のことを先に前倒しでやるとかいうことではなく、確実に力をつけさせていくということが改善につながるのではないかと考えています。

協力委員

基本的に実践校の姿というのは、すごくわかりにくいという印象をもっています。分離型であろうと一つの学園にすべきだと思っているのです。ここは小中一貫教育を推進する会議なので、推進するという観点でしゃべらせてもらいます。

今、私たちは実践校ということで取り組んでいるのですけれども、やはりゴールが見えないので力が入らないと、何をやらたらいいのだろうかというのがあります。もちろん今できることをやっつけていこうということで実践しています。我々のグループの場合は、本校が中心になって算数のほうのカリキュラムを作っております。カリキュラムを作成している中で、中学校ではこういうことをやるのだ、この授業が中学校のこういうところに生きてくるのだということで、小学校で私たちが授業する目が変わってきていると思います。

中学校の先生にしてみれば、今、旭丘小と乗り入れ授業をやっていきますので、小学校の授業

はこうなのだという面で授業改善につながっていると思います。職員のアンケートなどからもそういうところはうかがえることができます。そういう点での改善というのはできていると思うし、検証もできているのではないかと思います。

ただ、これを数値化しようとする、かなり厳しいと思います。課題改善カリキュラムの場合、例えば中学校でどの部分が弱いということから始めてカリキュラムを作っていた方がいいと思っています。

カリキュラムを作るには、手間がかかります。2番にかかわってくるのですけれども、例えば区としてある程度の課題改善カリキュラムというか、小中学校が連携している部分の概論を作っていて、その中でどの部分が役立って、どの部分をさらに深めればいいのか、それぞれの校区で考えていくというのも一つの手だと思います。それぞれの学校がみんな算数のカリキュラムを頭を抱えながら作っている状況は、どうなのかと思います。いろいろな学校で理科をやっている、いろいろな学校で国語をやっている。もちろんその中のそれぞれの学校、校区の中で焦点化しないといけませんから、焦点化してやるのはそれぞれの学校でやればいいと思いますが、ある程度の大きな範囲として、一つの教科、国語とか算数とか、そういうレベルであれば、学習指導要領や教科書の内容も決まっているわけですから、ある程度のものは区のほうで作っていただいたほうが、学校ではそこからスタートできていいのではないかと考えております。

連携先小学校を増やしたり変更したりすることについては、いい面もあるし悪い面もあると思います。例えば小学校が二つあれば、A小学校とB小学校とでは温度差がかなりあると思います。その温度差を同じにしていくということが必要だと思いますので、そういう点で変更することも大事だと思うのです。

ただ、我々教員は学校を異動しなければなりません。6年やって、やっとなんか深まったところで異動していく。今まで学校を担っていた先生がどんどんいなくなってしまうと、果たして小中一貫教育を深化させていけるのかということです。そういう難しさがありますが、そういう意味でも実践校というのが中途半端だと思います。施設分離型であろうと「小中一貫教育校である」と宣言してしまえば、我々教員はやらざるを得ません。子供のために小中一貫教育校という看板を出した以上、子供たちのために何ができるのか、それぞれ探していかなければいけないわけです。やらなければいけないことはたくさんあります。

ですからそういう形でゴールが見えていけば、お話しが出されていたと思いますけれども、私たちもやらされている感というのはそんなにないのです。もちろん仕事がたくさん増えて忙しくなるのはつらい部分というのがありますが、子供のために何ができるか、そういうところで何をすればいいのかというのが明確なものが見えているのであれば、私たちというのは動けると思います。

ですから実践校という形をいつまでもとらなくてもいいのではないかと私は思っています。もちろん練馬区全部同時にというのは無理ですので、できる場所として、施設が近いところなどからできるのではないかと考えています。そういうところから順次始めていっても悪くないのではないかとこの意見です。

協力委員

今、3人の先生方が話されていたこととかなり重なる部分があるかと思いますけれども、実

践校という位置付けが教員全員の総意を作っていく上で非常に曖昧なのかと思います。施設が離れていても小中一貫教育校であるという指定をかけていくことで、教員間の温度差というものを埋めることができるのかと思っています。まさに④の小中一貫教育を日常教育活動の中に定着させていくための一番の工夫が、離れていても小中一貫教育校であるという位置付けを失ってしまうことになるという思いでいます。

②に示されている連携する教科の拡大についてですが、小学校の教員もそれなりに各教科専門性というものをもって、各学校の中で教科部会を設けています。例えば国語が専門、社会が専門、算数が専門、理科が専門ということで教科主任を設けてやっているのです。課題改善カリキュラムを焦点化して研究していくということももちろん大事だと思うのですが、中学校の方たちと縦につながっていくのでしょうか、教科ごとの部会を作っていくことで、課題改善カリキュラム自体の領域を広げて作っていくことは可能だと思います。そうすることによって、必然的に全教員が小中一貫教育というものについてかかわっていくこととなりますので、教員間の温度差を埋めていくということにもつながっていくという思いでいます。

協力委員

④番のところなのですが、いつまでやればいいのか、やらされ感という点でいうと、私も中学校の先生から「卒業した子がこういうところが良くなりましたよ」と聞くと、良かったなという気持ちにもなりますので、中学校の先生と小学校の先生でよく話し合うとか、よく会うとかというところをやっていけば、送り出して良かった、実践していて良かったという気持ちになると思います。

また、他校でも、「こういう良いところがあったよ」という事例を紹介していただければ、自分たちの学校でも実践できると思います。それが難しいことだ、それは無理だよとなりがちなので、こういう簡単なことをやったらこうだったよという紹介を言い合えるような会があったりとか、あるいは新聞のようなものがあれば、いろいろなグループで実践していけると思うので、そういう工夫をしていけるといいと思います。とにかく今のところ、やらされ感があるので、それを何とか連携クリエイターの我々が取り除いていくのが仕事ではないかと思っています。

委員長

どうもありがとうございました。かなり共通した声が出ていたような感じがします。ゴールが見えないとか、ビジョンが固まっていない感じがすごいです。教員の異動も、公立学校というのは付きものです。だから、特色ある学校づくりをしようとすればするほどこういう問題は大きくなって、京都みたいところはフリーエージェント制を部分的に何%か入れています。人事的な工夫も抱き合わせにしていけないとなかなか難しいのかもしれません。

教育委員会が全区展開という方針を出されているので、定義とのかかわりもありますけれども、連携にしろ一貫にしろ、練馬区の定義としては、一貫だという位置付けをしながら連携方式を広げていくと、国が考えているようなカリキュラム編成まで踏み込んだような小中一貫教育というのは多分ごく少数にしかならないのかもしれません。それが96校のうちの例えば三つとか四つの少数の学校の組合せだとすると、区民にとっての公平感という問題も出てきてしまう感じもします。かなり入り組んだ問題だと思います。

これは小学校の通学区と中学校との接続問題にも絡んでいます。だから、一つのブロックとかグループでエリアがきちんと分けられれば、それなりのグループなりエリアの中でそれぞれ別個の特色を作り上げるということは可能だけれども、通学区を分断してしまっている構造の中で、どこまで持つとか、いろいろな問題が絡んでいるという状態が見えてきました。

委員

本校は今三つの小学校と実践に取り組んでいます。①の検証という点では、今まで2年間研究してきましたが、研究結果を検証しなければ、研究になりません。検証として一番わかりやすいのは、数字です。そこで、学力では学力テスト、体力では体力調査、あとは生徒の意識アンケート調査で検証していくしかないだろうということになりました。算数、数学、あと体育でカリキュラムを作っていますので、まず体力テストの結果を見て、持久力が足りないから小学校と中学校で合わせて持久力を高める運動をやっていきましょう。算数、数学は、不得意な子は学力テストである程度わかります。最終的には小中学校9年間の状況を検証しなければいけないのですが、2年間の研究期間中に検証をしなければいけないので、意識調査が一番わかりやすいと考え、アンケートを行いました。いずれにしても検証するためには、数字が必要だと思います。

全教科というのは限られた時間では結構厳しいと思います。

実践校でトーンダウンしたという表現がありました。決してトーンダウンではなく、当たり前になってきたということです。近くの学校に授業を見に行きます、研究授業に行きます、研究討議に参加しますという活動が当たり前になったからトーンダウンと感ずるのかもしれませんが、決して実践校でトーンダウンしたということはありません。次は何できるかなと、中学校側では考えています。

ただ、連携する小学校を広げると、目の前にあって100%入学してくる小学校と、歩いて7分ぐらいかかると、大体3分の2ぐらい入学してくる小学校が来ます。歩いて18分ぐらいかかると3分の1しか来ない小学校というのは、小学校の側の意識が違います。

P T Aのほうでも、泉新小学校とは研究をやっていて、すごく仲がいいです。保護者の方から見ると「三原台中学校は泉新小学校と仲がいいのですね。うちの学校には何もやってくれないのですね」という感じがあります。今年は生徒会が行って中学校説明会をやったり、理科の授業を見に行ったり、少しずつ取り組んできました。橋戸小学校は結構乗ってくれて「算数、数学やります」と言ってくれたので、「こうやっているのですか」という声かけをして、少しずつ動いています。光和小学校も「何か協力できることはやっていきましょうか」というふうには、泉新小学校とやったことを今、広めつつあります。難しい部分もありますけれども、小学校は距離と規模、進学先、いろいろな状況が違います。すべての小学校と同じ歩調というのは難しいのですが、「一緒に地域の子供たちを育てていこう」という意識は徐々にできつつあると思っています。

委員

今お話を聞いていて、反省しなくてはいけないと感じました。本校も実践校として、中心になっているメンバーは、小中一貫教育の効果や大切さを本当によくわかっている状況がありますが、今、研究しているグループや、まだ研究していないグループが「早くうちも指定してほ

しいな」というふうに言えるような発信がどうだったのだろうかと思っています。

誰のための小中一貫教育かというと、やっぱり地域とか保護者とか子供たちのためです。その方たちが「うちの学校はまだ小中一貫教育を始めないのですか」と言うぐらいのことがないと、本当の実践校としてはまだまだなのかななどと思いながら話を聞いていました。地域とか保護者とか子供たちが小中一貫教育のメリットをきちんと言ってくれること、それから学校としてメリットを感じられること、設置者である練馬区として「小中一貫教育はこんなにいいですよ。やらないと損ですよ」ぐらいのことを言えるように意識していかないといけないと思います。取り組んでいる学校でやったことに対する成果を確実に感じられているのですけれども、それがどれぐらい他校の意識を高めていくことができているのかということが、お話を聞きながら不安になりました。

本校の場合には、小・中学校だけでなく、同じ中学校区の小学校の間でも連携をとっていこうというところに力を入れています。これまでは高学年だけが一緒に活動していましたけれども、来年からは全学年がクロスして、半分が小竹小学校に、半分が旭丘小学校に行ってもらって、1日そこでそれぞれの交流をしたり、ただ交流だけだといけないので、それぞれの先生から授業を受けたりとか、そういうことも進めていこうとしています。そういう実践をやった中で、保護者の方とか地域の方とか子供たちから口には出さなくても「やっぱりみんなで一緒にやるってすごく楽しいよね」とか、「力がついてきたよね」というような姿が見られて認められていくということが本来一番大切なのかなというふうに思いました。

そういう姿が出てくれば、小中一貫教育の取組がトーンダウンしたとか、いつまでやればいいのかという教員側の意識というのも随分変わってくるでしょうし、保護者の方の意見もぜひ聞きたいのですけれども、周りから「早くやってくれませんか」と言われるような取組をしていかないといけないと思いました。

委員

実践校とか研究グループのやってきた実践を報告書などいただいて、その中で自分の校区でできるものは何かということで検討して、いいところは取り入れたいと思っています。中学のほうでこういうことはできるだろうというものを考えて小学校の校長2人と、来年はどうしようかという打ち合わせをしました。その際一番難しいのが、二つの小学校があまりにもいろいろなことが異なっていて、「例えばAということはどうですか」と言ったときに、こちらは「それはできますよ」、でもこちらは「それはうちは無理だと思う」というふうなことがたくさんあります。

実は今日と昨日、出前授業で両方の小学校に行ったのですけれども、小学校側の受け入れ態勢が違っていました。中学校がイニシアチブをとってやろうというふうに努力はしているつもりなのですが、それぞれの小学校が違うととてもやりにくい状況があります。最初は中学校1校とやりやすい小学校1校でいろいろなことを進めるやり方がやりやすいと思っています。3校で同時スタートして同じ足並みでというのは、なかなか難しいなというふうに感じているところです。

それから資料2で、教育目標の統一化というのがあります。小学校にしても中学校にしても、教育目標というのは大きく変わりません。知・徳・体ということで、中学校は言葉が難しく、小学校は仲のいい子とか優しい子など簡単な言葉になっているだけで、それほど変わりません。

本校の場合は、知・徳・体に関することプラス人に関することと国際理解に関することということで五つの大きな柱があります。ですからこれはそんなに難しくありません。小学校、中学校の特性と発達段階がありますので、同じことにそろえなくても学習指導要領が基本になっていますので、ここのところはそんなにこだわらなくてもいいと思っています。

2番目の9年間を見通した教育課程ということですが、これもやはり小学校と中学校の育てる子供の特性は違いますので、共通で考えられるものは共通で考えるし、違うものは違っていかなければいけないと思っています。

北九州市では、市内全域で全部小中一貫教育校という形でやっています。例えば小学校2校と中学校1校ならば、教育課程の補助資料のような一覧表を3校で作って教育委員会に提出しています。それを見ると、例えば理数教育の重点だったら、A小学校ではこういう目標があって、こういう教育活動、B小学校ではこう、中学校ではこうということで、3校とてもよくわかるようになっています。

それがあると、例えば3校の校長が共同作業して、自分の学校の教育課程についてやっていると、ここはこういうふうにすれば9年間を見通したものになるということがすごく話し合いがしやすいのではないかと思います。北九州市はそういうのを全部出していますので、ホームページに載っているかどうかはわかりませんが、たまたま私はそこに行って研究会に出る機会がありましたので、自分でもすごく勉強になりました。だから、教育課程も9年間を見通したものは作ろうと思えば作れると思っています。ただ、さっき言ったように、両小学校と3校同時でというのは困難を感じています。

3点目ですが、課題改善カリキュラムは、すごくいい取り組みだと思っています。もちろん、中学校の授業は、小学校でどのようなことを学んで、その上に中学校の教科指導があるということは、全ての教科の中で授業改善の一環としてやっていますけれども、その校区、その学校の実態、児童の実態、生徒の実態を例えばこの教科が弱いとか、あの教科が弱いとかいうことを見ながらやっていくというのは、とてもいいことだと思います。

ただし、ここにも課題があって、自分の地域の小学校から公立中学校へ行く子供の割合がどのくらいかということです。私立志向、国立志向、都立中高一貫校志向が強いこと、また、校舎改築にあたっているということがありますので、学校選択制で隣の学校を選択したり、抽選で外れても、なおかつ8条申請などを出したりする実態があります。そういう中で課題改善カリキュラムをつくるには、どこに焦点を当てていけばいいのかというのが、一つの課題かなと思っています。

あと、先ほどお話があった挨拶とか学習規律など生活指導の部分は、すごくいいと思っています。いわゆる情報交換、小学校でどうだった、子供たちが中学校に来てどうなったかということは情報交換会でやればよいと思います。そこで私のところの校区別協議会の第1回目では、中学1年生が挨拶ができない状況があるので、まず挨拶から教える、それから教員に対する言葉がため口というのでしょうか、そのような言葉遣いになっているので、大人に対しての言葉遣いを教える、そこから始めています。小学校高学年がどういう実態なのか分かり、小学校の先生も中学と全く同じでなくてもいいので、ある程度共通した指導ができるといいなと思っています。来年は、そこに視点を当てて分科会を作って、校区別協議会をやりましょうということになっています。こういったあたりから私どもの校区では、課題改善カリキュラムに取り組んでいこうということになっています。

最後に、分離型に適した条件ということですが、やはりいろいろな実践をやって報告されていて成果が上がっているところは、割と中学校の学校規模が小さいところが多いような気がします。大きい規模になったときに、なかなか難しいかなと感じています。また距離の問題もあります。子供の足で歩いて5分ぐらいだったら移動もできるし、私たちも移動していきやすい。小学校の中休みということで、2時間目と3時間目の間に20分の休み時間がありますが、その時間を活用すると移動していきやすいのですが、子供の足で歩いて20分ぐらい離れている、しかも交通が激しいところとなると、移動を考えると、あまり遠いところとは連携しにくいと思っています。

距離が離れている場合は、カリキュラムを共通にして、行き来しなくてもお互いにやっているという内容を共通理解をして進めていくことが大事なのではないかと思っています。

委員

実践校も、まだ迷っているというのが正直なところだと思います。教科書に書いたような形の小中一貫教育校というのがまだできないし、まさに実践校だってみんな手さぐりの状態なので、そこをまず一言言っておきたいと思います。

資料2の①から⑨まで考えてみました。下からいくと、9年間の教育課程を提出していますが、施設分離型小中学校の教育課程はどのようなものになるか。実は、本校のグループは3校で教育課程の情報交換をしました。教育目標として9年間の3本柱、知性にあふれ正しく判断できる人、心豊かで品格のある人、健康で行動力のある人、これは3校そろえて入れましょうということでそれぞれの学校で今までのものを生かしたような形で入れて作ったのです。

豊玉第二中は、小中一貫教育プログラムの27年度全面実施ということも意識して書き込んでいますが、二つの小学校は、そこまでは書いていません。ただし、小中連携教室で共通の授業をするということは小学校でも書いています。こういう形で3校の教育課程の届出に対して、やはり9年間を見据える教育目標について、書けるところは書くようにしました。やはり、知・徳・体の目標ですからそんなに多く違うことはありません。3校で教育課程のすり合わせをするけれども、豊玉第二小の教育課程を見たからといってノーチャイムを入れて、豊玉第二小と全く同じ形でやっていくかということとそういうつもりはありません。全く同じにしてしまったら豊玉第二中の附属小学校のような形でカラーがなくなってしまいます。それはやはりまだ検討していかなければならない内容だと思います。

今度は⑧の、分離型で具体的にどう意思決定を図っていくかということなのですが、やはり中学校のほうでゆくゆくは小中一貫教育プログラムを考えて、小学校はそれを受け入れるという形で意識して、それに向かってやっていくという形で考えているわけです。

小学校としては、今までだったら6年生を終わって「あとは中学校お願いね」という形の意識がありました。ところが小中一貫教育9年間といたら、送り出す側の責任を感じなければいけないし、この意識を私は職員にもっと今年以上に来年は浸透させていかなければいけないと思っています。逆に中学校のほうも受け入れる側の責任という形で、「小学校はこんな形で、もっとあれやってください。これやってください」、「それはうちのほうでもやります。そのかわり3年間で学習指導はばっちりやってください」、「うちの学習規律はここまでやっていったのだから、それをさらに伸ばしていく形でよろしくお願いします」という、送り出す側、受け入れる側という意識をお互いにもっと高めていかない、「知らないよ」という形では済まない

いう意識改革をしていかなければいけないと思います。

⑨、⑧については、そういう意味で教育課程から小学校側・中学校側双方の意識ということを考えていかなければいけないなと思っています。

それから、④番に関して小中一貫教育を豊玉第二中の教育活動の中にどうやって定着させていくか。これは先ほど生活指導、挨拶というようなこと、学習規律などということを行いましたけれども、実は昨日、豊玉第二中学校の校長先生がうちの学校へ来て、小学校全校、1年から6年に対して朝会の挨拶をしました。また、豊玉第二小の校長先生は豊玉第二中で2月に挨拶しました。私は3月10日に中学校へ行って挨拶することになっています。校長もみずから何かできることはないか。「ああ、あの中学校の先生がこっちに来たんだ」、「小学校の校長が卒業生にエールを送り方々行くのだ」、こういうような形で朝会に顔を出して、それだけで全て教育ができるというわけではないのですけれども、そんな形でもアピールをしていこうという試みもしています。

⑤番、⑥番に関して、9年間、施設分離型で下支えをするという点で、保護者、地域、PTAが3校連携がとれたらいいなということで今、豊玉第二中グループではPTAが年3回ですけれども定期的に連絡会を行っています。

委員

うちは毎月1回やっています。

委員

教員と児童・生徒だけではなくて、子供をもつ親としては9年間そこにかかわることになります。PTAの連絡会、それからPTAが町会と関係して地域の避難訓練やいろいろな行事を積極的にかかわっているので、小中学校で役員を引き受けたりされる方もいるし、いろいろな行事にPTAの出でいく役割があり、それから学校行事にもかかわるという点では、この辺はやっぱり欠かせないところではないかと思っています。

組合せと学校規模という話がありましたけれども、これは③番と⑦番に関係しますが、資料3番のほうを見ていくと、やはり三原台中学校グループの場合には、光和小学校は離れているし規模も大きい。最初に組み合わせるところとして、無理やり全部グループにしなければいけないのだろうかという疑問は私も感じます。だからといって、やらなくていいということになると、また異論があるかと思っています。やりやすいところ、やりにくいところがどうしてもあるのではないかと思います。

最後に②番なのですが、課題改善カリキュラム、そしてまた、これは中学校全教科ということなのですが、実は小学校の教育会の講話のなかで、小学校の歴史は人物とか出来事のエピソードを中心にやるけれど、中学校の歴史ではそのところはちょっと内容が違ってくるとい話がありました。小学校の社会の歴史でやり過ぎることはなくて、あとは中学校のほうに任せるとか、小学校と中学校で共通する教科ではあるのだけれども、もうちょっと分野とかやる範囲をきっちり確認をする、そのところも課題改善カリキュラムにかかわってくるのかと思いました。

国語、算数については、東京都の学力テストをもとにしたデータをもっと小学校、中学校が意識して使って、指導計画に活用していくということをするれば、また、それをもっと全区的に

確認をするような形にしていけばいいのだけれども、なかなかそこまでいっていないところです。

委員長

どうもありがとうございました。一通り先生方から課題とかこれから取り組むべきこと、反省すべき点についてお話いただきました。PTAのほうから今までの先生方のお話を伺った感想でも結構でございますので、いかがでしょうか。

委員

今お聞きして、先生方がかなり大変な思いをされているのだなと感じております。小中一貫教育を進めていますという、一番初めに配られた資料の中に小中一貫教育の目標として授業改善による学力・体力の向上とか、連携指導による豊かな人間性、社会の育成、滑らかな接続による安定した学校生活の3点があります。こういうふうを考えていますと、例えば不登校の減少はありましたというふうには結果は出ていると思いますし、あと人間性、社会性の育成というところで、生活習慣に関して小中学校で同じような形で目標をもってやられていると思っております。

学力に関して言えば、一番わかりやすいというのは数学とか算数だと思うのですが、例えば中学校でつまづいている子供というのは、小学校でわからないで過ごしてきた子どもたちだと思います。そこを検証してここを強化してくれとか、そういった形がとればきっと結果というのは中学校で出てくると思いますし、一気に進めるのではなく、少しずつ小中一貫教育を進めていただければいいのではないかと思います。その結果、子供たちは勉強がわかるようになって学習意欲も出てきて、きっといい結果になるのではないかと思います。

前に、木下川先生の学校にお伺いしたときに、4・3・2の区切りという説明を聞きました。そのときに思ったことなのですが、4年生が高学年になると、かなりすごい力を発揮している。4年生なのに中心となって3年生までを面倒見ているというのを聞いて、5～6年生もできるとは思うのですが、そういった子供たちの可能性というものも出てくるという部分では、9年間というものを知らっしやる学校に対しても、いろいろ意見を聞いてみるべきではないかと思います。

委員

私は吉羽先生のところのPTA会長をやっておりますので、豊玉東小、豊玉第二小、豊玉第二中のPTAの活動について補足させていただきます。私は第2土曜日、あいさつ運動に、立って自校の子供たちに声かけ運動をしているのですが、豊玉第二小へ行ってやろうとか、あるいは豊玉第二小のPTA会長が本校へ来てとか、そういう話も具体的には進めて今おります。

先生方のお話をお伺いして、やはりある程度の小中一貫教育のアウトラインというのを作っていかないと、なかなか厳しいのかなと思っております。アウトラインを作るとするのがこの会の趣旨でもあると思っておりますが、現状のやり方は、会社で言えば3つの会社の社長一斉にやれと言っているようなもので、僕も会社を経営していますが、なかなかそれは無理だと思います。今は、豊玉第二中グループは言うなれば連邦制でやっているようなもので、合議制で非常にうまくいっていますが、それが練馬区全体にいけるのかといたら、先ほどお話が

あったように無理だと思います。もし、各実践校、あるいは研究グループにある程度任せてやっていけというならば、やはりその中の3校の組織づくりをしていかないと、温度差が出てきてなかなか進まないのではないかと思います。ある程度アウトラインを作って落とし込んで、あとは地域性や学校の事情によって細かい細部はやってほしいという形が一番スムーズなのではないかと思っております。

ぜひ、ここは事務局にもお願いしたいのですが、評価の問題です。我々もPTAの代表として教育課程検証委員会だとか中学校選択制度検証委員会も出させていただいておりますが、実際に小中一貫教育を推進することによってどう変わったのかということ、やっぱり結果の評価というのは、これはしなければいけないのではないかと思います。

評価というのは当然のごとく定量的評価と定性的評価、両面で見なければいけないと思います。定量的評価というのは、当然のこととして学力だと思います。定性的というのは、しつけの問題だとか挨拶の問題だとか、そういうことがあると思います。ぜひ、事務局にお願いしたいのは、ある程度進んだら検証する委員会を作って、結果がどうなったのかということをやっただけであれば、我々保護者としても評価がしやすい。逆に言うと、ぜひ、やってほしい、いい結果が出ればと思っております。

委員

質問ですけれども、保護者として何ができるのかというのが見えてこないで、その辺をもしお話しできる方がいらしゃれば。

例えばうちは、小中学校で避難拠点も町会も違うのです。そうすると、保護者も手伝う保護者が全く違うという部分で連携が全くとれないといった状態があります。ほかにも保護者ができることというのは何があるのだろうかというのがあります。

委員

あいさつ運動の話がありましたけれども、やっぱりそういうところからだと思います。保護者をお願いしたいことは、学校と意識を一緒にして子供の教育のことを考えていっていただけるのが一番と思っています。学校と保護者が一緒に子供たちを育てていくという意識で良い方向、それぞれ違う立場で良い方向に導こうということで一緒に話し合ったりしていけば、そこで具体的なものというものは出てくると思います。今すぐ思い浮かぶのは、やっぱり生活指導面の部分だと思うのです。挨拶であったり、学習規律であったり、そういうものを保護者の方も一緒になって、学校としてこういう形でやっていきたい、それに対して一緒に協力していただくというのが一番かと思っています。

委員

例えば先生方と運営委員会とか、そういったものは開いておりますが、学習面に関してまた別に話し合いをもったりとか、そういう形でよろしいですか。

委員

そうですね。例えば当たり前のことなのですが、宿題をちゃんとやるとかそういうところからです。宿題をする。挨拶をする。今、寒い時期ですが「ポケットに手を入れないで

歩く」、そういうことを言っているわけです。「薄着にして、できるだけ遊んでいきましょう。」それでも、なかなかそれが徹底できない部分というのはあります。大事なことから学校としても言っていますので、そういうことに対して一緒に同じ目線で子供たちのことを考えていただけるとすごくうれしいです。

委員

基本的なしつけみたいことですね。

委員

しつけなども含めて、学校と一緒に子供たちのことを考えていただきたいということです。

委員

義務教育9年間を見通した教育課程といったときに、教育課程の中身というのはどういうものがあるのかよくわからない部分があります。教科に限れば、例えば9年間を見通したといたら、中学3年生のそのあるべき姿の状態に小学1年からもっていく教育課程を作るのか。9年間はどこが目標なのか。例えば中3のあるべき数学の力とか生活態度とか、この年代だったらここだよねということを考えて9年間割り振るような作業をするのか、小学校は小学校でこういうものがあってと言ったときに、見通した9年間の教育課程というのはどういうイメージを先生方はお持ちなのかなというのをお聞きしたいと思います。

委員

あくまでも私のイメージなのですけれども、連携していることで中学3年生の姿というのを見通すことが大事だと感じています。ただ、中学3年生でこうだからそれを前倒しでというよりは、そういう姿を目指して今、私は低学年なのですけれども、低学年ではこういうことをしっかり学習で身に付けさせたいということです。それには課題改善カリキュラムを作るに当たって、中学校の先生が系統図を作ってくださったのですけれども、学習面ではすごく役に立っています。

また、中学校に授業を見に行ったり、学校公開にお邪魔するようになって、今までは「さようなら、頑張っね」だったのが、身近な中学校、同じ学校という意識で中学生の姿を見ることが、いつもいつも意識しているということではないのですけれども、やはりこういう子供たちになってほしいというのを小学校の担任も思った上で、発達段階に応じて低学年はこういうふうにしなればいけないとか、中学年はこういうふうにしなればいけないということを持つことが大事なのではないかと思っています。

委員

本校は非常に小規模な学校で、今6年生を担当しています。6年生からすると、自分の上は同じ学校の中にはいないわけです。僕らの子供のころは、子供がたくさんいましたから、自分がお手本にしたい先輩が割と身近なところにいたと思うのです。あこがれといいますか、上級生の姿を見て下級生も育っていくというところがあったのですけれども、本校に関しては、目標にする上級生もなかなか探しにくいというところがあって、それを考えると、やはり練馬区

として9年間の義務教育をやっていくわけですから、中学3年生が立派にやっているという姿をより早い段階で小学生の段階の子たちに見せることで、将来的な自分の成長のビジョンというものが子供たち自身も持てると思います。

少子化への対応という点でも、小学校と中学校が連携して、子供たちのあるべき姿を子供に体感させ体得させていくというところがあるといいと思っています。そこでは、練馬区として中学校3年間を終えた段階で、こういうところを育てて、重要視していきたいというところを出していただけると、それに従って各校が各地域の状況なども考えて、カリキュラムなり、教育目標なりというのを立てやすくなっていくと考えます。

委員

かたい話だとカリキュラムの最終的な目標というのは、学校の教育目標の実現だというふうになるわけですが、私が校長として小中連携に取り組んだときは、隣の校長先生と話して自己有用感のある子供をどうしても育てたいという思いでカリキュラムを小学校と中学校で一緒に考えてきました。

どういう子供に育ってもらいたいかがまずなければいけないと思うのです。数学、算数のできる子だとか、道徳性のある子だとか、それはこれから小中一貫教育をやる学校がどう考えて、どういう子供を育てるということをまず、すり合わせるが大前提かと思います。

この前、小中一貫教育校へお伺いして、一体型のすばらしいところをたくさん見せていただきましたが、これは分離型だと非常にやりにくいところが結構あるわけです。これから小中一貫教育を始めようかという学校では、この推進会議で出た課題を各学校の校長先生方が必ず考えるわけです。私たち推進会議の役割の一つとして、これらの課題に対して、どういうふうにするかということをおおむね道筋を示さなければいけないと強く思いました。

例えば中学校に対して距離の違う小学校A校とB校があったとき、どうしても距離の近いA校と連携を強めていろいろな教育課程を考えがちなのですが、B校が入ってきたことによって、A校とB校が同じことができないとまずいと私は思います。同じ地域の中にある小学校のA校とB校が、中学校とのかかわり方が違うということは非常にまずい。そのことに対して、どういうふうにして連携をしていくかということをおおむね考え方を示す必要があると思いました。どうしても連携のやり方のほうにどんどん話がいくと思うのですが、連携をやっていく上での課題を考えて、それに対して答えをおおむね身につけながらやっていく必要があると思いました。

私が上石神井中学校の校長に在任して、上石神井小学校との連携はうまくいったのですけれども、上石神井北小学校との距離が大分遠いという、そのことだけで連携できなくていいのかということがずっと私の課題意識の中がありました。これに対する答えをおおむねに出さなければいけないというそんな気持ちでおります。

委員長

どうもありがとうございました。時間があと15分ですけれども、まとめというのは非常にできにくいのですが、資料の7に、つくば市とか三鷹市とか足立区、杉並区の施設分離型の一貫教育校のデータがあります。こういうところも、多分同じような問題を抱えながらやっていると思います。練馬区の特長というのは、学校数が99校と非常に多いところです。足立区

とか世田谷区とか大田区の場合は大きいところですが、三鷹は中学校7、小学校15で22校だから割合こじんまりとしている。三鷹市のモデルをそっくり持ってこれるかということはあるけれども、逆に、こういうこじんまりしたところだってできるということであれば、練馬区内を幾つかのブロックに分けていって、例えば四つのブロックに分ければ20数校、というような机上の計算だって成り立つわけです。

ですから全区展開という決定はあるのだけれども、同じ尺度で同じプログラムで全区展開するというところまでは含んでいないので、仮に五つとか六つとかブロックみたいなものを設定した上で取り組めるのか取り組めないのか、それは通学区域との関係とか、簡単にいかない、ほとんど不可能なのかもしれません。施設一体型は1校あるのだけれども、2校目とか3校目、4校目みたいなものがどこの地域にどういう形であり得るのかという、現実的なシミュレーションみたいなものを踏まえていって、そこは物理的には可能だということであれば、施設一体型のモデルシミュレーションみたいなものを少し詰めてみることも必要です。

どう考えても無理だ、連携も難しいとなりますと、品川もそうだったのですが、単独校方式でやらざるを得ないケースもあると思います。隣が離れ過ぎていて、そうすると単独校は単独校で良さを追求するという議論も出てきて、割合連携しやすい学校間距離のところは連携の仕組みを模索しようということになってくると思います。だけれども分離型は、施設一体型に比べると非常に難しいのです。運用が難しい。だから、品川区では独自で学習指導要領みたいなものを作って、カリキュラムとか指導法の面で横並びにしようという形を考えたのです。ただ、非常にこれは難しいと思います。教員の異動がある。校長先生だって入れかわるので、特色ある学校づくりをすればするほど、なじんでいない先生が入ってきたときに一体どうなるか、という問題が校舎建築などでもあります。宮代町の笠原小学校という、東武動物公園の真ん前にできた非常に特色のある校舎建築があります。ものすごくすばらしい学校なのです。最初は設計するときに先生方と研究会を2年間ぐらいやって、細かい注文がたくさん出たものを全部生かして、できた当初はすばらしい学校になった。だけれども公立ですから、先生がどんどん異動すると、何でこんなへんな学校を作ったのという話になっていって、最後は校長先生もかわってしまって、ほとんど普通の学校になってしまいました。建物が奇抜であればあるほど設計の考え方と教育方法を一致させつづけることは難しいと思います。そこら辺をどうするか。希望する先生はとどまれるような仕組みを人事異動の面で考えるかどうかとか、いろいろなものを絡み合わせないと難しいという気がします。そういう意味で言うと、まず、とりあえずは施設分離型、一体型のモデル校みたいなものを一方では考えていって、そういうモデル校の場合にはどういう条件を付与していけばうまくいくのかというチェックをかけていってはどうか。

国の定義だと外れてしまうけれども、練馬区だと連携すれば小中一貫教育校と呼んでいるわけですから、そういう定義というのは意外と便利な面もあって「生かしていますよ」と言えるわけだから、「みんな一生懸命やっていますよ、連携ということで」と言えるわけだから、説明はしやすいということはある。そこら辺の絞り込みがこの次の段階で議論していただくことかと思えます。

ただ、目の前にいる子供は待たないなので、目の前にいる子供の利益というのは、当然PTAからは3年先などと言われては困る、うちの子は学校から卒業してしまうという意見が出てくると思います。目の前にいる子供の利益はやはり最優先しなければいけないのだけれども、

ビジョンそのものはすぐはできない面もあるから、両方追求しなければいけないというつらさが多分先生方はあるのだらうと思います。そこをどうするかということはこの次の会あたりで検討することになるのかと思います。

あと教育委員会のほうでほかの自治体の施設分離型小中一貫教育校の特色などを説明していただけないでしょうか、三鷹市とか、つくば市、足立区、杉並区という。三鷹市はすごく有名ですけれども、本当にこんなきれいにうまくいっているのかなという気もします。

事務局

(資料7 説明)

委員長

どうもありがとうございました。ちょうど時間が参りましたので3回目の会議を終わらせていただきます。

今年度はこれが最終回になりまして、会議は来年度も継続いたしますけれども、委員の中には異動でほかの地区にかわられる可能性もあるので、メンバーが変わる可能性があるかと思えます。引き続きご参加いただきます委員さんは、来年度もよろしく願いいたします。

(閉 会)